

小学校高学年にむけた文学の読解と教育方法の研究

教育学部 大橋直義

【本共同研究の背景と目的】

いかなる校種・発達段階においても、「読む」という行為は国語教育において不可欠の要素である。なかでも「文学」あるいは「物語」を読むという営みは、単なる説明書きを過不足なく理解することとは異なり、そのテキスト内に過去現在未来の時の流れが前提化されているという点において、人を人たらしめる基礎的要件であるとしてよい。

その一方で、人によって「読む力」に大きな差異があることもまた事実である。人は、いかにして文学・物語を読むという行為を獲得しているのか。その能力はどうすれば錬磨向上させることができるのか。本共同研究においては、そういった観点を核心部分に配し、特に小学校4年生から6年生の児童に向け、物語を読み解く上での「感度」を高める方法を具体的に模索しようとするものである。

なお、本共同研究は、2019年度に行なった共同研究「小学校高学年にむけた文学の読解と教育方法の研究—殊に複式教育による「教室内メンター」の存在に関して—」からの連続となるものである。そこでは、類同の物語構造（「額縁構造」）を持つ二篇を比べながら読むことと、複式学級での教育方法・カリキュラム構成とについてあわせて検討・実践を行なった。本年度の共同研究では、複式学級という点についての検討は行ないえなかったものの、文学・物語を構造的に読む、その方法を可視化・言語化するという点で、さらなる進展が期待されるものであった。

【実施内容・概要】

本共同研究では、2021年1月23日（土）に和歌山大学教育学部附属小学校で開催された「2020 教育研究発表会 冬の部」における研究授業（宮脇隼教諭「アイテムの効果をとらえて読もう「初雪のふる日」：4年B組」）の場を主要な成果報告の場ととらえ、そこに至るまでの研究と実践を次のように行なった。

◎2020年9月14日（土） 第一回打ち合わせ

【場所】和歌山大学 栄谷キャンパス 教育学部棟 南206（国語演習室）

【時間】17時～19時

【参加者】宮脇隼教諭・大橋直義。国語教育専攻：大橋ゼミ学生6名（大原可奈：リーダー。大成一維、岡田亮輔、伊藤菜々子、奥田知、芝優真）。

【概要】

本年度の共同研究における主要教材として、安房直子著「初雪のふる日」をとりあげるこ

とが決定した。本作品は、少女が一人で行った石けり遊びをきっかけに冬の異界へと迷い込むが、祖母の記憶をきっかけに一冬を越えた元の世界に戻るという筋の掌編である。どちらかといえばとらえどころの無い作品であり、それゆえに指導方針の核も定めづらい難物の教材である。

まず、ミーティング参加者がそれぞれの感想と方針を述べ合うなかで、「登場する事物についての背景（たとえば「石けり」とはどのようなものか）の共有」および「登場する事物が物語の中でいかに機能させられているのか」という問いを発出・確認することによって、物語全体の構造に注意を喚起するという方法が提示された。

◎2020年11月8日（土） 第二回打ち合わせ

[場所・時間等] メール審議

[参加者] 前回と同様

[概要]

学部学生（大原可奈：4年）が研究の成果を授業において実践するための方法を模索した。その結果、「初雪のふる日」ではなく、椎名誠著「プラタナスの木」を教材とし、2月初旬に授業実践の機会を頂戴することが決定されたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症を防疫徹底のため、実地の授業を行なうことは叶わなかった。

◎2020年12月15日（火） 研究授業（録画）

[場所・時間] 附属小学校4年B組（宮脇学級） 14時35分～15時20分

[参加者] 宮脇隼教諭（授業者）・大橋直義、他（附属小学校教諭）

[概要]

宮脇教諭を授業者として、「初雪のふる日」作中の事物「アイテム」に注目し、その作中の機能・意義を問い直し、そのことによって、「初雪のふる日」の物語構造を「起承転結」という観点から読みなおすこと、また「ごんぎつね」における「アイテム」との比較という観点から、研究授業を行なった。その後、当日の研究授業を聴講していた大橋を含む若干の先生方によってミーティングを行ない、「アイテム」の機能のみならず、その表現面での分類も行なうことによって、作品の機構（からくり）を読む方法が提示された。

◎2021年1月23日（土） 教育研究発表会

[場所] 附属小学校およびオンライン（Zoom）

[参加者] 現地：宮脇隼教諭（授業者）・大橋直義（指導助言）・司会運営（附属小学校教諭）

[概要・課題]

オンライン上で県内外の初等教育関係者とディスカッションを行なった。共同研究の方法そのものは概ね好意的にとらえられたものの、構造把握に終始しすぎた感もあり、特に比喩・象徴の関係を読み解くための方法についての再考を行なう必要性が可視化された。